杉本苑子

随筆集

# 霧の窓

霧の窓

一九九二年八月十五日　印刷
一九九二年八月二十日　発行

著者　杉本苑子
発行者　深見兵吉
発行所　光風社出版
東京都文京区春日二ノ四ノ一
郵便番号一一二
TEL　〇三(五八〇〇)四四五一
FAX　〇三(五八〇〇)四四五二
振替東京　八―一二九一三

印刷　大盛印刷
製本　越後堂製本

©乱丁、落丁の場合はお取り替えします
◎定価はカバーに表示してあります

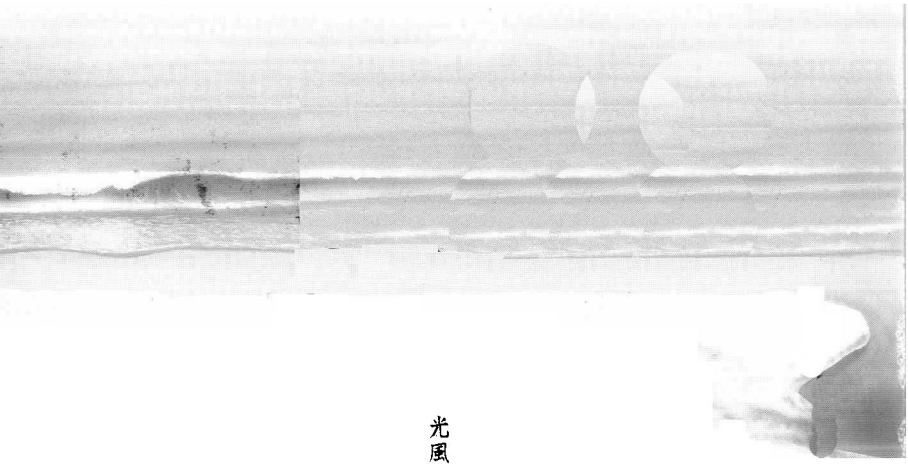
©SONOKO SUGIMOTO 1992　Printed in Japan

ISBN4-87519-912-0 C0095

# 杉本苑子

随筆集

# 霧の窓



光風社出版

霧の窓

# 目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　美しいものとの対話――7
雨の法浄寺 9　山中常盤 12　沈黙は金 15　激動の世紀を見守った道具たち 21　長屋王と邸跡出土の木簡 27　平城京展を見て 31　古代の鼓動が聞える 34　魚掛け 36　梅の薫りの中に息づく女人たち 39　愛らしい香合 41

第二章　折り折りの思い――45
現代・東京考　私的愛情論 47　我が夏終る 49　ぬれぎぬ 53　トンネルの上の梅 57　蔦の性 60　桜に包まれた夢幻の旅―京焼を訪ねて― 65　ただ一冊の『おくのほそ道』 67　あの人、いつのまにかいなくなってしまったなあ 69　がんばれ子パンダ 72　惜春 75　家康の鷹 78　蜘蛛を殺す 81　銃後 84　緑の魔境 88　石段の数 91　男たちよ、戦え 94　新幹線つれづれ草 97

第三章　芝居と私――101
波の底にも都の候 103　心の劇団「すわらじ」 107　まじめは親ゆ

ずり 110　俊寛像のデフォルメ 113　好きな役者さん 117　変幻自在 119　わしのほうが上手だぞ 124　作りあげられた悪女 127　中村仲蔵の『手前味噌』 131　初芝居 135　人買い舟は沖を漕ぐ 139

## 第四章　仕事の余暇に

143

チャンバラに縁のない人たち 145　作家と読者の関係 148　句をめぐる雑感 151　手の裏返す 155　バイプレイヤーの活用 158　虎の年あれこれ 161　私の一冊―泉鏡花「斧琴菊」 164　しごとの周辺 166　素材との出遇い 175　私のバイブル 178　超えられるか 180　卯年の春 184　あかぎれの手 187　ケーキを半分 189　青春の一冊―小林静雄氏の『世阿弥』 192　月界人界 195　史書の行間 197　元号雑感 199　昭和と私 202　自作再見―滝沢馬琴 206　無常の世のダンディズム 208　金王神社の広間で 214　ゴミという名の怪物 216　てんやわんや 219　ルビつき誤植 222

## 第五章　心に泛かぶあれこれ

225

遠い花火 227　灰皿 230　かがみ女 231　直木三十五氏の手紙 232　片

脚の鳩 234　ほととぎす 237　芝木さんを惜しむ 239　私の〝殿さま旅行〟高遠から木曽路へ 241　もう幾つ寝ると… 245　親離れ子離れ 247　ミニサイズ 249　木綿に想う 251　星ひとつ―書店と私― 255　庭たずみ 258　風媒花 259　漱石と出会う―私の〝愛読書〟 262　闇が作った精神構造 263　五月のウグイス 265　誕生日 268　スリリング 273　峠の道 276　いちびりッ子 277　市松人形―記憶に蘇る顔 279　おかちんの耳 283　思い出メルヘン―『青い鳥』 284　九十一歳の記憶力 286　犬に咬まれた日 297　自分と出会う 300

あとがき

装幀　坂本勝彦

# 第一章　美しいものとの対話

## 雨の法浄寺

中国の揚州に、鑑真和上ゆかりの寺をたずねたのは去年の五月であった。

鑑真については、もういまさら贅言を費やす必要はないと思う。五度におよぶ失敗にもめげず、失明の厄にさえくじけずに日本への渡航をなしとげ、律宗の戒を伝えた高僧である。

平城京へ入ってのちは勅によって東大寺に住し、戒壇院を設立――。聖武上皇、光明皇太后、孝謙女帝はじめ多くの僧俗に戒をさずけ、大僧都、大和上の尊号を賜った。

のち、西ノ京に唐招提寺を創建して移り住み、天平宝字七年五月、七十六歳で波瀾の生涯を閉じている。

若葉しておん眼の雫拭はばや

と芭蕉が詠んだ盲目の尊像は、いまもなお一人の異国僧の、日本人への愛の熾烈さを具現して、対する者を感動させずにおかない。

その鑑真が在唐中、止住していた寺の一つが、当時の大明寺、げんざい法浄寺と呼ばれている古刹なのである。

堂宇が建てられたのは西暦四五七年からほぼ十年にわたるあいだ……。時代でいうと中国の南北朝、年号でいえば大明年間にあたる。このため初号を大明寺と称したが、一七六五年、清朝の乾隆三十年に法浄寺と改められたのだという。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

日本人留学僧の栄叡、普照らが、
「ぜひ、わが国のひとびとにも、律疏の教えを授けてください」
と懇請しにきたのは、七四二年、中国が唐朝の支配下にあったころで、ようやく渡海に成功し、鑑真が日本の土を踏んだのはそれから十年後の七五三年……。六十六歳の冬であった。
揚州は鑑真の生まれ故郷――。揚子江北方の大運河に臨む江蘇省の省都である。繊細な切り紙、漆器や刺繍、金銀、象牙のみごとな細工物などを産出している伝統芸術の町で、むかし、鑑真の生家も恒産ゆたかな貿易商だったらしい。
車が止まり、法浄寺の山門前におり立った瞬間、アーチ型の通路をうがった石造りの、屋根のとがりにしろ彩色をほどこした装飾にしろ、いかにも中国風な、エキゾチシズムあふれる二層の楼門を仰いで、
「千二百年前、栄叡らも期待に胸をはずませながら、その境内に一歩を印したのだな」
ふっと、時空を越えた感懐がわたしをとらえた。
空は曇ってやや、むし暑かったが、寺中の一殿に通され、香りたかいジャスミン茶の接待を受けているうちに強い驟雨が地表を叩きはじめた。
中国の五月は美しい。リラ、アカシア、桃、藤、菜の花、アイリスの濃紫、桐の花の薄紫など、どこを歩いても花々に迎えられるが、法浄寺境内はことに全山、息づまるばかり豊かな樹林で、それが雨しぶきにみるみる洗われ、青葉あざやかによみがえった印象は目が醒めるようだったし、暑さもおかげで去って、涼風が室内に満ちた。
壁には、わたしたちへの寺側のおもてなしか郭沫若氏自筆自作の詩が軸装されて掛かっていた。

鑑真盲目航東海
一片精城照太清
舎己為人伝道芸
唐風洋溢奈良城

この殿閣の庭で、わたしは珍しい花樹を見た。琼花という名の花である。琼の字は、音をそのまま京にあてはめた略字で、本当は瓊と書く。光りかがやく珠玉の意味。つまり瓊花とは、玉さながら美しい花と解釈してよさそうだ。

庭は白壁の築地で囲まれ、ところどころに奇岩怪石が配されて、中央は手入れのよい芝生だが、その芝生の向こう側、石廊に面した真正面に、こんもり枝葉を茂らせた大樹が見え、それが琼花の木なのであった。

点々と白い花をつけている。雨がしきりに降りそそぐ中で、遠目にも花たちの揺らぎが痛ましい。水しぶきを浴びながら通訳のかたが一人、走って木の下へ行き、花つきの枝を折って来てくださった。

専制君主の名をほしいままにした隋の煬帝が、わざわざ琼花を見に、三回も揚州をおとずれた、その行幸用の船の便を兼ねて大運河を造らせたのだなどと伝説的には語りつがれているけれど、実際には宋代あたりから琼花はこの地に植えられたという。

それ以前、道教の琼花観にあったころは、

「花を見にくる人の賽銭で道士どもは悠々とくらしていけたそうですよ」

とのこと……。

また、元軍が根こそぎ掘り起こして、持ち去って行きかけるアクシデントも、この花の運命を見舞ったことがあるし、欧陽修という人などはいとしむあまりに、無双亭と名づける覆い屋まで建てて木を保護したとも聞いた。「世に、二つなし」との賛辞であろう。

しみじみ、わたしは琼花に見入った。ガクアジサイに似て、顔を寄せると、甘ずっぱくほのかに香る。黄色の、粒状のシベを囲んで、肉厚な五弁の葩が開き、小さなその一つ一つが集まって花かんざしさながら、かれんな一輪を形成しているのだ。豪華さや、あでやかさとは遠い。むしろ淋しい感じすら受けるが、明澄な気品は見る者を搏つ。すがすがしくけなげな、凜とした表情の花だった。

同じ寺域に、鑑真記念堂が建ち、宋代の古蹟平山堂も、地つづきの山かげにある。「天下第五泉」と折り紙つけられた名泉が、平山堂の園内には今なお、こんこんと湧き出ていたが、やはり何にも増して鮮麗にわたしの脳裏に灼きついたのは、雨中に咲きさかる琼花の白さであった。国境や人種のちがい、小さな個の感情をぬきん出た次元で、静かに、ひとすじに白熱しつづけた鑑真の愛の精神を、無言のうちに具象しているかのようにも、それは見えたのである。

——読売新聞　一九七七年四月二日朝刊——

## 山中常盤

MOA美術館は、私の家から車で十四、五分のところにある。時おり来客を案内して出かけるけ

れど、中には気のどくがって、

「相手が変るたびにつき合っていては、たまりませんなあ、飽き飽きするでしょう」

と同情してくれる人もいる。

しかし美術品というものは、同じ展示品を何回くり返して見てもよいもので、案内して廻るのを迷惑と感じたことは一度もない。それに月代りで、特別展示が催される。先日、出かけてみたときは、常時、出陳されるもののほかに岩佐又兵衛展をやっていた。

正直いって、私はこれまで岩佐又兵衛の画業に、さして注目したことがなかった。実物の絵に接したこともなく、美術関係の本などで、たとえば東博所蔵の『竜図』、川越東照宮蔵の『柿本人麿図』、あるいは現在、MOA美術館の蔵品となっている重美指定の『官女図』ぐらいを、写真版で目にしたにすぎない。そして、少しもこれらの諸作品から芸術的興奮を受けなかったのである。

ただ、又兵衛勝以という画家が、荒木村重の伜だという事実には、興味を抱いていた。

村重はその豪宕な気性を織田信長に愛され、重用されて、摂津一円の経略を委されるまでになったのに、突如、叛いた。

謀叛の疑いをかけられ、弁解が通りそうもなかったため肚をくくって挙兵に踏み切ったとも言われているが、信長という人物には、松永弾正にしろ明智光秀にしろ、ある日いきなり理も非もなく、結果の成否や利害損得を超えて、叛きたくなるような一面があったのではなかろうか。

むろん村重は失敗してしまう。毛利氏を頼って安芸へ逃げ、後年、剃髪して、秀吉のお伽衆に加わったけれども、悲惨をきわめたのはその余類だった。村重の居城の伊丹城は、城主を失ってあえなく陥落……。城中の男女二百数十人が捕えられて磔柱にかけられ、妻妾や子供らは縄付きのまま

洛中まで曳かれて、六条河原で斬刑に処された。

岩佐又兵衛の生母も、このとき無残な死をとげた側室の一人であった。幼少の又兵衛自身は、乳母に助けられて伊丹城を脱出し、かろうじて一命をとりとめたのだが、以来、母方の岩佐姓を名乗って成長した。

武門の修羅を見てしまったために、家の再興とか報復とか、そんな気持は育たなかったらしい。又兵衛は信長の子の織田信雄に小姓として仕え、やがて狩野内膳について画を学び出す。土佐光則にも師事したようだ。

だから又兵衛の画風には、土佐派、狩野派のほか海北友松、雪舟の雲谷派など雑多な影響が混在し、無特質であるところが、かえって特質とも見える。浮世絵の嚆矢とするには、やや筆法が固く、古様だし、芸術品として扱うには感銘度が薄い。

「閲歴はともあれ、画人としての魅力にはいま一つ欠ける人……」

その程度の先入観と予備知識だけで、不用意にMOA美術館へ出かけたため、特別展示品の浄瑠璃絵巻『山中常盤』に接して、私は仰天してしまった。

全十二巻。合計すると長さ一五〇メートルにも及ぶ長尺の巻物である。詞章と絵を交互に組み合わせ、山中の宿駅で母の常盤を盗賊に殺された牛若の仇討物語を、蜿蜒と展開しているのだが、絵の精緻さ、金銀や彩色をふんだんに使った豪華絢爛さに圧倒された。

ことに私が目を奪われたのは、常盤と侍女が殺害される場面である。衣裳を身ぐるみ剝がれ、白い湯巻き一つにされた女体が、刺され血しぶき、髪を乱して座敷に、庭に倒れ、肌から刻々、生色を失って死骸に変じるプロセスが、これ以上はないと思えるほどリアルに描かれているのを見た瞬

間、又兵衛の味わった幼児期の体験が、どれほど深刻な爪痕を彼の精神に残したか、私は知らされた思いがした。牛若の刀の一閃で、賊どもの首と両足が血を噴出させながらすっ飛ぶ描写もすさまじい。戦国乱世なら、日常茶飯事的見聞だとも言えなくはないけれど、酸鼻を見据える眼の、異様なまでの鋭さ、執拗さは、やはり特殊である。意識の底に隠されている母への痛恨……。それを支えにしてこそ生まれるものだし、画面にみなぎる迫力は、妻子を捨てて逃げた父村重への、怒りの現れではないかとすら思えた。

むろん、このくらいの長尺物になると、又兵衛工房のスタッフの共同制作だろうが、注文主は彼のパトロンだった福井松平侯だといわれている。奥方や姫君、奥女中ら、血臭に馴れていた当時の女たちは、でも案外、平然と残酷場面を眺めていたかもしれない。見る側の心理までを忖度しつつ、強烈細美な絵巻物の前に私は釘づけされたのであった。

——中央公論　一九八二年九月——

## 沈黙は金

御室仁和寺のおたふく桜がさかりだと聞いて、この春、見に出かけた。じつは京都博物館で開催中の『大徳寺名宝展』が目的であった。

大燈国師宗峰妙超の自賛を附した画像、牧谿筆の白衣観音・猿鶴図、喜左衛門銘の井戸茶碗、密庵咸傑の墨蹟、龍光院蔵の燿変天目など、日ごろ写真でしか目にできなかった国宝クラスの優品が



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.